喉頭紡錘細胞癌の1症例

加藤 久幸¹⁾・小森 克彦²⁾・櫻井 一生¹⁾・岡田 達佳¹⁾
堀部 晴司¹⁾・小串 善生¹⁾・鈴木 洋平¹⁾・三村 英也¹⁾
内藤 健晴¹⁾

A Case of Laryngeal Spindle Cell Carcinoma

Hisayuki Kato¹⁾, Katsuhiko Komori²⁾, Kazuo Sakurai¹⁾,
Tatsuyoshi Okada¹⁾, Seiji Horibe¹⁾, Yoshio Ogushi¹⁾,
Youhei Suzuki¹⁾, Hideya Mimura¹⁾ and Kensei Naito¹⁾

It is comparatively rare that Spindle cell carcinoma occurs in the larynx, amounting to around 1% of malignant larynx tumors.

We reported on the therapeutic experience of one Spindle cell carcinoma case. Our case, a 56 year-old male, had fallen down due to dyspnea at a subway station and was transported by ambulance to the hospital. During the initial diagnostic phase, while conducting a fiberoptic examination, it was found that the larynx lumen was full of the tumors which were presented as a flat, dark redness on the surface of the larynx.

We performed an emergency tracheostomy for airway maintenance. A biopsy led to the diagnosis of low specialization type squamous cell carcinoma. The treatment required a total laryngectomy and neck dissection on both sides as the glottic carcinoma was at an advanced stage, T4N0M0.

Histopathologic examination of the extracted specimen determined that the growth was specifically Spindle cell carcinoma.

Key words: 紡錘細胞癌, 喉頭, 手術, 呼吸困難

はじめに

喉頭癌の組織型はほとんどが扁平上皮癌であり、他の組織型の癌に遭遇することは稀である。紡錘細胞癌は極めて稀で喉頭悪性腫瘍のうちの1%前後といわれている¹⁾。紡錘細胞癌は、扁平上皮癌成分と間質性分の肉腫様発育をした紡錘細胞が混在してみられる二相性の癌腫で、「いわゆる癌肉腫」とも称される。扁平上皮癌成分から紡錘細胞への移行像が認められる特徴から、真性癌肉腫とは一線を画し、扁平上皮癌の一亜型に分類されている。今回我々は喉頭に発生した紡錘細胞癌の1例を経験したので若干の文献的考察を加え報告した。

症 例

症 例: 56歳男性
主 訴: 呼吸困難
既往歴: 特記すべき事なし
家族歴: 特記すべき事なし
現病歴: 平成15年9月頃より嗄声, 咽喉頭異常感があつ

たが放置していた。平成16年1月1日地下鉄駅前で呼吸困難のため倒れているところを発見され、救急車で近医に搬送された。上気道閉塞を疑われ気管内挿管を試みるも不可能であり、当科に紹介され同日入院となった。

入院時所見: 喉頭ファイバー検査では喉頭内腔に充満する、暗赤色、表面平滑な腫瘤を認めた。披裂部の可動性は両側ともに保たれており、頸部リンパ節も触知しなかった(図1)。

頸部CT検査にて声門上から声門下にかけて、喉頭内腔に充満する内部が不均一に造影される軟部組織陰影を認め、その一部の輪状軟骨への浸潤が疑われた(図2)。

入院経過: 入院後、呼吸困難が強かったため、緊急気管切開術を施行した。間接喉頭鏡下に数回生検を試みたが、炎症性肉芽組織が採取され確定診断がつかず、平成16年1月21日全身麻酔のうえ、直達喉頭鏡下に生検を行ったところ、低分化型扁平上皮癌と診断された。その結果と画像診断から声門癌 T4N0M0 と診断し2月4日喉頭全摘出術、両頸部郭清術を施行した。術後経過良好にて3月13日退院となった。その後、2年間経過したが再発なく経過良好で

1) 藤田保健衛生大学耳鼻咽喉科学教室

2) 知多厚生病院耳鼻咽喉科

1) Department of Otolaryngology, Fujita Health University School of Medicine

2) Department of Otolaryngology, Chitakosei Hospital

図1 入院時喉頭ファイバー所見
喉頭内腔に充満する，暗赤色，表面平滑な腫瘍を認めた。

ある。

摘出標本および病理組織学的所見：摘出標本では声門上から声門下にかけて声帯膜様部を基部とする巨大な腫瘍が喉頭内腔に充満していた（図3）。病理組織学的所見としてはHE染色弱拡大像で一部に角化を伴う異型細胞の増生と紡錘形細胞の混在がみられ（図4a），強拡大像では，紡錘形細胞の核分裂像，扁平上皮癌成分から紡錘形細胞への

移行像が認められた（図4b）。以上より，紡錘細胞癌と診断された。また，病理組織学的検索により，実際は甲状軟骨，輪状軟骨への浸潤はみられず，腫瘍の基部は声帯膜様部に限局しており，頸部リンパ節転移も認めず，結果的には声門癌 pT1aN0M0 であった。

考 察

紡錘細胞癌は扁平上皮癌と肉腫様組織の両者が同一組織内にみられる組織学的特徴を有する。肉腫様組織の主体は紡錘細胞であり，その由来や性格から，いわゆる癌肉腫²⁾，偽肉腫³⁾，肉腫様癌⁴⁾などの，様々な名称で呼ばれている。1991年のWHO分類によれば，紡錘細胞癌は1つの腫瘍組織中に扁平上皮癌成分と紡錘型細胞や多形性細胞成分を有する二相性の癌腫であると定義されており，近年では紡錘細胞癌の名称が一般的であるとされている。一方第2版の頭頸部癌取り扱い規約では，紡錘細胞癌といわれる癌肉腫は扁平上皮癌の1亜型として別個に定義付けされているが，両者の相違点は明確にされておらず，同3版では扁平上皮癌の亜型として紡錘細胞癌と癌肉腫の名称をあげるのみで詳しい定義は記載されていない。このように頭頸部癌における概念にはいまだ混乱があるように思われるが，現在では電顕による検討や免疫組織学的検索から扁平上皮癌の一亜型とする意見が優勢のようである⁵⁾。

好発部位としては肺，食道，乳腺，卵巣などがあげられ⁶⁾，耳鼻咽喉科領域では喉頭が最も多く，鼻副鼻腔⁷⁾や下咽頭梨状陥凹⁸⁾に発生したという報告も散見される。

本邦における喉頭紡錘細胞癌の既報告例は，いわゆる癌肉腫，偽肉腫癌，sarcomatoid carcinomaなどの名

(a)

(b)

図2 頸部CT検査（a：軸位断，b：矢状断）

声門上から声門下にかけて，喉頭内腔に充満する内部が不均一に造影される軟部組織陰影を認めた。

図3 摘出標本 (a: 声帯レベル, b: 輪状軟骨レベル)
声門上から声門下にかけて声帯膜様部を基部とする巨大な腫瘍が喉頭内腔に充満していた。

図4 病理組織学的所見
a) HE 染色弱拡大像
一部に角化を伴う異型細胞の増生と紡錘形細胞の混在がみられる。
b) HE 染色強拡大像
紡錘形細胞の核分裂像, 扁平上皮癌成分から紡錘形細胞への移行像を認める。

称で、我々の渉猟し得た限り自験例を含め38例の報告があり^{4, 5), 7-31)}、それらの症例に関して表1にまとめた。

年齢は50～90歳で、平均年齢は68.4歳であった。性別は男性33例、女性5例と男性に多く、発生部位は声門型27例と最も多く、声門上型8例、声門下型1例、transglottic typeが2例であった。T分類はT1 24例、T2 10例、T3 1例、T4 2例、不明1例であり、早期癌が大多数を占めていた。頸部リンパ節転移陽性例は比較的少なく4例のみであった。

治療法の内訳は喉頭全摘出術を行った症例が最も多く14例で喉頭部分切除術が3例行われており、両者のうち4例

に放射線治療が施行されていた。腫瘍切除術後に放射線治療を行った症例が10例あり、うち5例に化学療法が併用されていた。放射線治療単独が7例、化学療法＋放射線治療が1例、腫瘍切除術＋レーザー2例、腫瘍切除術3例であった。

本疾患の治療法は肉腫様部分に対する放射線感受性が低いことが考えられることから、手術が第一選択とされてきた。しかし、Balloら³²⁾は早期声帯肉腫様癌に対して放射線治療を行い、喉頭扁平上皮癌と大差のない成績であったと報告している。今回の検討でも放射線治療単独7例中再発は1例のみであり、早期癌に対しては放射線治療から開

表 1 本邦における喉頭紡錘細胞癌の報告例

発症年齢：50～90歳（平均66.9歳）		
性別：9：1で男性に多い		
発生部位：	声門部	18例
	声門上部	5例
	声門下部	1例
	transglottic	7例
T分類：	T1	19例
	T2	8例
	T3	1例
	T4	3例
治療：	喉頭全摘術	13例
	腫瘍切除術＋放射線治療	6例
	放射線治療	6例
	喉頭部分切除術	3例
	腫瘍切除術＋レーザー	2例
	腫瘍切除術	1例
予後：	生存	26例
	腫瘍死	3例
	他因死	2例

始して反応をみながら、追加治療を選択するのがよいと思われる。また、手術が必要と判断される場合も、本腫瘍は茎を有しポリープ状やソーセージ状に發育し、かなり巨大であっても実際には多くの報告がそうであるように早期癌である場合があるので縮小手術が期待できることを念頭に置く必要がある。本症例においては生検の結果、扁平上皮癌であり、CTにて輪状軟骨への浸潤があると判断したことより喉頭全摘術を選択したが、結果的には早期癌であり縮小手術が行えたかもしれない。

予後は生存33例、原病死3例、他因死2例であった。原病死3例は全例N2b以上の症例であり、頸部リンパ節転移例の予後は不良であった。

ま と め

- 1) 喉頭紡錘細胞癌の1症例を経験したので報告した。
- 2) 喉頭全摘術を施行し術後1年7ヶ月経過したが、再発なく経過良好である。
- 3) 本邦における喉頭紡錘細胞癌の既報告例は自験例を含めて38例であり、まれな疾患であると考えられた。
- 4) 本腫瘍の發育様式を念頭においた治療法の選択が必要と考えられた。

文 献

- 1) Ferlito A : Histological carcification of larynx and hypopharynx cancers and their clinical implications. Acta Otolaryngol Supple 342 : 12, 1976.
- 2) 金子 寛 : 喉頭に発生したいわゆる癌肉腫 (Carcinosarcoma) の1症例. 日耳鼻 66 : 1410～1417, 1963.
- 3) Lane N : Pseudosarcoma (polypoid sarcoma like masses) associated with squamous-cell carcinoma of the mouth, fauces, and larynx. Cancer 10 : 19～41, 1957.
- 4) 石井祐司, 牧嶋和見, 杉本卓矢ほか : 喉頭原発のSarcomatoid Carcinomaの2症例. 耳喉頭頸 69 : 250～255, 1997.
- 5) 小路丸篤, 山口陽生, 津田邦良ほか : 喉頭 spindle cell squamous carcinoma の1例. 耳鼻 42 : 969～972, 1996.
- 6) Saphir O & Vass A : Carcinosarcoma. Am J Cancer 33 : 331～361, 1938.
- 7) 川堀真一, 奥田 稔, 坂口幸作 : 上顎洞と喉頭の癌肉腫2症例. 耳鼻臨床 72 : 635～643, 1979.
- 8) 五十嵐秀一, 富樫孝一, 野々村直文ほか : 喉頭および梨状窩に発生したいわゆる癌肉腫 (so-called carcinosarcoma) の2症例. 耳喉 57 : 1021～1026, 1985.
- 9) 吉野邦俊, 上村裕和 : 喉頭紡錘細胞癌. 耳鼻臨床 88 : 1120～1121, 1995.
- 10) 韓 相善, 北村溥之, 高北晋一ほか : 喉頭紡錘形細胞癌例. 耳鼻臨床 88 : 911～915, 1995.
- 11) 千々和圭一, 森 一功, 宮嶋義巳ほか : 扁平上皮癌以外の喉頭悪性腫瘍についての検討. 喉頭 10 : 22～27, 1998.
- 12) 吉村英治, 湯田厚司, 大川親久ほか : 放射線治療を行った喉頭紡錘形細胞癌2症例. 耳鼻臨床 93 : 967～970, 2000.
- 13) 工藤香児, 藤吉達也, 若杉哲郎 : 喉頭原発紡錘細胞癌の1症例. 日気食会報 55 : 22～28, 2004.
- 14) 久保隆一, 曲田公光, 鹿島直子ほか : 喉頭の偽肉腫癌 (Pseudosarcomatous Carcinoma). 耳鼻 15 : 93～99, 1966.
- 15) 佐藤文彦, 佐藤良暢, 松井隆史ほか : 喉頭蓋に発生した so-called carcinosarcoma の1例. 耳鼻臨床 64 : 618～622, 1971.
- 16) 荒木真哉, 青木興佐, 高村善夫ほか : 声帯のいわゆる癌肉腫症例について. 耳鼻臨床 71 : 453～458, 1978.
- 17) 山地誠一, 寺山吉彦, 田中克彦ほか : 喉頭 pseudo-sarcoma の電顕. 日耳鼻 79 : 1109～1110, 1976.

- 18) 高田信昭, 城戸信行, 難波紘二ほか：喉頭の carcinoma の1症例. 日耳鼻 85:1653, 1982.
- 19) 渡部 俊, 大久保洋, 永田和人ほか：喉頭のいわゆる癌肉腫の一症例. 耳鼻 28:208~213, 1982.
- 20) 菊田宣男, 吉田秀一, 齊藤 謙ほか：喉頭に発生した pseudosarcomatous carcinoma の1症例. 日耳鼻 86:1497, 1983.
- 21) 寺久保洋次, 田中久夫, 野々村直文ほか：喉頭に発生したいわゆる癌肉腫の2症例. 日耳鼻 87:623~624, 1984.
- 22) 古川 飢, 田中佐一良, 加納美樹子ほか：声帯に発生したいわゆる癌肉腫. 耳喉 58:209~214, 1986.
- 23) 藤井 隆, 佐藤武男, 吉野邦俊ほか：喉頭の spindle cell carcinoma の3症例. 日耳鼻 91:1110, 1988.
- 24) 松田知愛, 江崎秀夫, 前原法文ほか：喉頭に発生したいわゆる癌肉腫の一症例. 耳鼻臨床 補28:72~73, 1988.
- 25) 進 保政, 粕谷尚男：喉頭のいわゆる癌肉腫の1症例. 日耳鼻 92:634, 1989.
- 26) 依田明治, 末永 通, 小崎秀夫ほか：喉頭紡錘細胞癌の1症例. 日耳鼻 93:314, 1990.
- 27) 齊藤優子, 久 育男, 高木伸夫ほか：喉頭紡錘細胞癌例. その組織学的検討. 耳喉頭頸 62:889~893, 1990.
- 28) 海老原秀和, 宮原久夫：呼吸困難を呈した喉頭のいわゆる癌肉腫. 耳鼻臨床 84:1451~1456, 1991.
- 29) 宇野芳史, 齊藤龍介, 松岡寿子ほか：喉頭に発生した稀な悪性腫瘍の3症例. 耳鼻臨床 85:419~426, 1992.
- 30) 益田宗幸, 有馬敏夫, 新里祐一ほか：喉頭に発生した monophasic spindle cell carcinoma の1例. 耳鼻 38:100~106, 1992.
- 31) 篠原孝之, 有友 宏, 稲木匠子ほか：喉頭紡錘細胞癌の1例. 松山赤十字医誌 18:65~68, 1993.
- 32) Ballo MT, Garden AS, El-Naggar et al: Radiation therapy for early stage (T1-T2) sarcomatoid carcinoma of true vocal cords; outcomes and patterns of failure. Laryngoscope 108:760~763, 1998.

別刷請求先 〒470-1192 愛知県豊明市沓掛町田楽ヶ窪 1-98
藤田保健衛生大学耳鼻咽喉科学教室

加藤久幸